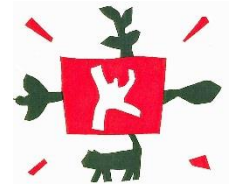




共同通信



2016年12月21日 244号(453号)

日本基督教団 西宮公会教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22

TEL 0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email koudou@gamma.ocn.ne.jp

<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901

To tell the story 142

「大切なことって」

最近事務所に出入りをさせていただいている久保田と申します。共同のことを知ってからまだ半年にも満たない新参加者が、何かお話できることなどあるのかしら・・・？とお恥ずかしいのですが、筆を取らせていただきました。今日はこの場所と出会ったきっかけと、先日参加させていただいた、福島大学の荒木田岳先生をお迎えしての「たのしい教会の火曜日」のことを書かせていただこうと思います。

共同と出会ったきっかけは、連れ合いの森が政治・思想研究会／関西神学塾で沖縄講座で話す機会をいただいたことでした。最初は森から話を聞いては、どん

なところだろうと想像しているだけでした。その後、7月の七夕まつりに高校生の息子と伺う機会に恵まれました。

一歩入った幼稚園の木々が！子どもたちがのびのび走り回っている！小屋に大八車の屋台まで！牧師さんがTシャツとGパン!? おとなのみなさんのあたたかい笑顔とまなざし。素敵なデザインのさまざまな手作りの品々。園舎に、大好きな絵本『いちご』が大きく描かれた布を見つけ、京都の野山を駆け回っていた幼い日々のことを思い出しました。目に映るものすべて、心と手がこめられている。なんて豊かなんだろう・・・。

時代にふり回されるのではない

あの時 心を躍らせて生きた

後悔に 身をふるわせたこともある

笑い 泣き 歯ぎしりをした

今日 こんな決意をしたという

自分の人生を語ってほしい、

自分の人生を語ってほしい、

自分の人生を語ってほしい、

自分の人生を語ってほしい

自分の人生を語ってほしい

西宮に暮らして約 8 年。中学時代から関西を転々として、ここ西宮でもどこかにお邪魔しているよそ者の感覚がありました。“にしきた”といえは日々職場を往復する駅のことでしたが、先日芸文センターのお誕生日会で、子どもたちと大先輩の方々が歌われる「にしきた〜♪」を聴いたとき、私の中の“にしきた”が、この地域のことを含めた言葉に変わってきていることに気がつきました。なんて有難いことでしょう。にしきた。ふふふ。

夏以降ときどき顔を出ささせていただく中で、日々眺めを楽しんでいた津門川は、地域の方々がきれいに保ってくださいだったことや、自由な雰囲気を感じていたアートギャラリーは、兵庫県南部地震のボランティアセンターとして活動されていたことなどを知りました。まだまだ短い時間ですが、共同との出会いに感謝しながら、教会・幼稚園・地域の方々が、本当に大切なことを日常の中でずっと積み重ねてこられたことを感じ知る日々です。

そんな中に 12 月 6 日の「たのしい教会の火曜日」に参加させていただき、荒木田先生から「福島の今をいきる」というテーマでお話を伺いました。そこでのお話はまた、「よそ者」「当事者」というむずかしさを考える時間でもありました。

深刻な汚染地域に暮らしている人たちがいる現状。政府もメディアも、原発事故とその影響は「福島の特別な問題」だと伝え続けている。そうすることで、「福島のことは福島で暮らす人たちにしかわからない。部外者が何か言うてはいけないのだ。」と、中の人にも外の人にも思わ

せる。中と外とを分断させて複雑にしていく力が働き、わたしたちの中にも知らず知らずにそうした意識が入り込んでい、と。大変鋭いご指摘でした。

さらに、孤立した福島内部では、「一丸となつてがんばろう！」という一枚岩ができあがり、そのことがまた問題を起こしているということでした。福島で暮らす人たちは、当然ながらそれぞれの気持ちや考えがあるにもかかわらず、一枚岩の前では、個人の不安な気持ちや自分の意見が言えなくなっている現状があるということでした。多様な価値観が抑圧され、そのうちに自分で自分を押さえ込んでしまうことが続くと、人や社会が壊れてしまうと話されていました。

私はお話を聞きながら、数年前に宮城県の子川でお会いした、あるお母さんが、自分より大変な目にあわれた方々を前に自分の話なんてできないとおっしゃっていたことを思い出していました。

荒木田先生はまた、こうした状況をつくっている原因のひとつとして、良心をもった人がこれまで沈黙していたことを指摘されました。良心をもった人たちが声をあげることが、同調圧力から脱して自己抑制を乗り越えていくことにつながるのだと話されました。

最後に大切なこととして、自分の足でデータを探し、自分の目で確認し、自分の頭で判断して発信していくことが、とても重要だと話されました。発信とは何も大げさなことではなく、不安や気持ちを率直に伝えていくことだともいわれました。そして、それは特に被災地に取り

残されている人たちが生き延びる上でも大切なことだ、と。お話の間に、何度か「生き延びる」という言葉を話されていたことが心に残っています。

参加された方々からたくさんの質問が出ていました。教えていただいた一部をここに共有させていただきます。(間違いがあればご指摘いただければ幸いです。)

・荒木田先生から大切な本としてご紹介がありました。成元哲編 『終わらない被災の時間—原発事故が福島県中通りの親子に与える影響(ストレス)』(石風社 2015 年) 福島の中通りで暮らしておられる幼い子どもを持つ親御さんたちの心の移り変わりを追った本とのこと。

・放射線量を調べる際は、「空間線量」ではなく「定時下降物」の線量が重要とのこと。(降下物とは、最も放射能を多く含む塵などが地上に降下したもの。地面が近いほど線量が高くなるそうです。) ちなみに福島市は、地上 8m という高い高さの計測値を公表しているそうです。

・「環境放射線データベース」のウェブサイトには、さまざまな情報が掲載されているそうです。



「人民の敵を愛すべし」

マタイによる福音書 5 章 43-48 節

(11 月 27 日礼拝説教)

新免 貢

(宮城女子学院大学)

キリスト教会の暦では、今日から待降節、アドベントが始まります。12 月 25 日のイエスの誕生日を心待ちにする季節として約 1 か月間設定められています。それぞれなりの過ごし方があります。来週から 12 月に入ります。12 月は互いに忙しいですが、何となく人を受け入れてみたくなるような、人を喜ばせてみたくなるような、互いの気持ちが和むような空気が漂います。そういう季節が待降節、アドベントです。キリスト教のささやかな社会貢献の一つくらいに思えばいいかもしれません。

ドイツの詩人・作家で、エーリッヒ・ケストナーという人がいます。ケストナーは、イエスの誕生日に寄せて、詩を書きました。その詩の中からいくつかの言葉を抜粋します。「あなたがこの世を去ってからこのかた、二千年近くになる、あなたは命の犠牲の子羊！あなたは貧しい者たちには彼らの神を示した。あなたは富める者たちの嘲りに悩まされた。あなたはすべての人間を自由にし、この地上に平和をもたらそうとした。人々には何の役にも立たなかった。あなたははねつけられたのだ。あなたは不逞の輩に対して勇敢に戦った。何をやっても効果はなかった。あなたは人々を愛したが、無駄であった。あなたが死んだのは無益であった。万事は昔のままであった」。

手を組み合わせて祈る多くのキリスト教徒たちにとっては、この詩人の言葉

は、イエスの誕生日に寄せて書いた詩としては、不快に聞こえるかもしれません。けれども、そこに一つの真実があるような気がします。というのは、イエスは殺されたけれども、挫折したけれども、敗北したけれども、今もなお、イエスのことは記憶され続けています。そういう意味ではイエスは勝利したと言えます。勝利はまさに敗北の中にあります。イエスは、敗北と挫折と失敗と恥と屈辱に寄り添い続け、いつも私たちを支えてくれる存在であり続けているのだと思います。人間の実在を感じさせてくれる存在、それがイエスです。

そういうイエスは、「敵を愛すべし」というのです。この言葉は、時空を超えて私たちの耳にこびりついて離れません。厄介な言葉として払いのけたいくらいです。実際にこれを実行しているキリスト教徒ばかりではないと考えられます。私たち自身も、こういう言葉の前に自分の無力を実感させられ、忸怩たる思いを抱かされることはよくあります。自分の気に入らない人から、「クリスチャンであれば、人を赦せ」などと言われたら、こちらとしては、「お前みたいな者に言われたくない」と言い返してみたくなります。けれども、何か払いのけにくい言葉です。聖書のことを学問的に研究する聖書学においても、これは、このままイエスの言葉遣いの再現ではなくても、イエスが実際に語った言葉とその場の空気を反映していると言われている。この「敵を愛すべし」という言葉は、マタイ福音書にもルカ福音書にも伝えられていますが、それぞれの文脈で意味合いは違っています。マタイ福音書では、エルサレムが第一次ユダヤ戦争（紀

元後 66-70 年）で滅亡した紀元後 70 年以降の過酷な状況においてキリスト教徒たちが自分の身を守って生きていくための行動の指針として、この言葉が引用されています。一方、ルカ福音書では、金の貸し借りによって生じ得る敵対的・対立的状況を緩和するために、この言葉は引き合いに出されています。さらに遡って、イエス自身が生きていた悲惨な時代においては、ローマ兵から気まぐれに殴られ、強制徴用され、あるいは、同じユダヤ社会の中に生きながらも、債権者からは着ているものまでも借金のかたに奪われることがありました。元来、そういう中で、「汝の敵を愛すべし」という言葉がイエスの口を通して発せられました。最初は「汝の敵を愛すべし」という整った言い方ではなかったかもしれませんが。「ああー！何ということか。とにかく、刃向かうな、あとがややこしくなるから。『何とかなる！』と腹の底で叫べ。実際、何とかなるものだ」という感じの言葉であったかもしれません。打ちのめされている側は、受け止め難い状況の中で、いろいろな結果を予測して、いろいろな工夫をし、いろいろな振る舞い方をしながら、圧倒的力を持っている敵と折り合いをつけて自分の身を守るしかなかったのです。「汝の敵を愛すべし」は、そういう状況に届く言葉でした。それでは、私たちの今の時代では、誰が私たちにとって「敵」なのでしょう。私たちは一体、誰を敵として認識しているのでしょうか。今の政権でしょうか。ヘイトスピーチをする人たちでしょうか。こんな話があります。

19世紀後半、ノルウェー南部のとある海岸の町で温泉が発見されました。町の人々は大喜びです。観光客をたくさん呼んで、観光による町おこしで盛り上がりました。仕事にありつけ、収入が増え、生活が豊かになり、みんな幸福になれそうな空気が漂っていました。その町にトマス・ストックマンという湯治場の医師がいました。医師トマス・ストックマンは、これからどんどん発展してくぞというそんな町の明るい雰囲気の水を差すような重大な発見をしてしまいます。製革工場からの廃液が原因で浴場を細菌で汚染していることを発見したのです。製革工場は、動物の生皮から毛や脂肪をとって、皮をなめし、軟らかくする作業をするところです。その作業過程で薬品が使用されます。工場主は実は、温泉が細菌で汚染されていることを突き止めたトマス・ストックマン医師の妻の父親、つまり、義理の父親にあたります。トマス・ストックマン医師の兄は市長です。トマス・ストックマン医師は、温泉が細菌で汚染され、健康被害が心配されるということで、市長である兄に温泉の源泉の使用を中止するように進言します。予算的にも技術的にも実行可能なことであると本気で考えて、トマス・ストックマン医師は、温泉を引き直すことを提案します。でも、いったん引いた温泉を、もう一度引き直すには実際は大変な費用がかかります。市である兄は、いくら弟か

らの提案とはいえ、経済的な利益を優先するために、経費のかかる温泉の引きなおしを却下しました。市長は、「お前の家族にも迷惑がかかる。町の財源を潰すことにもなる。単に科学の問題ではない。技術と経済の両面が入り組んでいる問題だ」とトマス・ストックマン医師を説得しようとしたましたが、うまくいきませんでした。トマス・ストックマン医師の妻も、「あなたの言い分は正しいですわ。でも、言い分が正しくても、家族のことも考えて」と説得を試みましたが、ダメでした。トマス・ストックマン医師は、地元の新聞社記者をも巻き込んで、汚染の実態と現実を訴えていきます。記者も乗り気でした。この問題を話し合うために、市民集会が行われました。ありとあらゆる階層の人たちが参加しました。けれども、集会では、トマス・ストックマン医師に対して汚いヤジを飛ばされました。トマス・ストックマン医師は、最初は味方してくれた新聞記者や印刷業者にまで裏切られ、彼の意見は抹殺されてしまいました。トマス・ストックマンの医師としての倫理と人間としての正義感は、多数派の民衆に通用しませんでした。「あいつは、人民の敵だ！国を憎んでいるぞ！人民を憎んでいるぞ！」「人民の敵！人民の敵！人民の敵！」と一斉にののしられました。圧倒的少数派のトマス・ストックマン医師は、温泉施設で発展しようとする圧倒的

教会の火曜日 10時から12時 於：西宮公同教会集会室

第1火曜日	わいわいお茶会
第2火曜日	ゆつくりと聖書を読んでみませんか
第3火曜日	読書会
第4火曜日	社会のこと、世界のこと

多数派から追放宣言され、文字通り、町の民衆の敵となっていました。彼とその家族は次第に孤立して行きます。これは、今から130年以上も前、ヘンリック・イブセンによって書かれた五幕劇『人民の敵』（1882年）の筋書きです（『原典によるイブセン戯曲全集4』所収、原千代海訳、未来社、1989年、163-264頁。なお、岩波文庫では竹山道雄訳『民衆の敵』（2006年））。

『人民の敵』を書くための材料となった事件が実際にありました。一つは、冷たい湧き水がわくある鉱泉場でコレラが発生した事件です。そこで医師として働いていた人が、医師としての義務感から、コレラの発生を人々に知らせました。しかし、その鉱泉が使えなくなり、町民たちがその医師の家に投石し、彼を町から追い出しました。この事件の展開は、『人民の敵』の筋書きそのものです。もう一つは、ある薬剤師が民衆食堂を告発した事件です。貧民たちに対して行なうべき世話を怠っていたというのが告発の中味です。その薬剤師は、その貧民食堂の総会で演説をしようとする、議長がそれを制止しました。会場が混乱状態に陥り、群衆は彼を無理に沈黙させました。しかし、その薬剤師は少しもひるまなかったそうです。これらの事件が『人民の敵』の内容に反映されています。

実は、この『人民の敵』とよく似た事例は、日本にもあります。たとえば、細川一（ほそかわ・はじめ）という医師がいました。細川さんは、トマス・ストックマン医師と似ています。細川一さんは、「公害の原点」ともいわれる水俣病に取り組みました。水俣病が公式に確認

されてから今年（2016年）で60年になります。先日、慰霊式が行われました。この水俣病は、有機水銀に汚染された水俣湾の魚を食べたことが原因でかかる病です。手足がしびれ、あるいは手足がまがり、まっすぐに歩けず、ふらつく、転びやすい、呂律が回らない、動作が遅くなる、めまいがする、視野が狭くなり、顔が歪むなどといった症状が現れます。母親の体内に育まれている胎児にも発症します。水俣では、魚を食べた飼猫が、奇妙な格好で、飛んだり跳ねたりして、不気味な症状がすでに表れていました。今でも、水俣病患者の写真を見るだけで、「こんなことをしてられない」という感じで、いっぺんに目が覚めます。あらゆる理屈や論理を超えた事実と、社会下層を犠牲にしてきた日本の近代化の深刻な実態が自分の眼前に迫ってくるような迫真性があります。

現在、国の基準をもとに認定された人は、熊本県を中心に三千人近くに上ります。海から離れた鹿児島県の山間部で、水俣病と診断される人が相次いでいます。これまでに水俣病の症状を訴えて2万1664人が認定の申請をしています。が、認められたのはわずか1787人にとどまっています。まだ終わっていない水俣病中毒の恐ろしい病気です。奇病とか遺伝病ではなく、工場の排水が海に垂れ流しにされ、その海で獲れた魚を食べた人たちが、水俣病にかかりました。

細川一さんは、この水俣病の原因を追究し、水俣病に苦しんでいる人たちを丁寧に診察し、見せる水俣病の患者たちを何とかしようと知恵と力と知識を捧げた立派な医師です。いろいろな圧力がかか

ることもありました。細川さんは、廃液を垂れ流しにしてきた工場を経営している会社の附属病院の院長だったからです。その会社があるおかげで、水俣の経済は支えられた面もあります。細川さんは、そのため、会社側と患者たちの側との間で板挟みになり、苦しみました。工場の幹部は大変権力的であったそうです。人の意見を聞かず、受け付けず、号令的な工場のやり方、それが上から下までの流儀になっていたそうです。会社にとって不利になる不都合なことは語らないように口止めもされました。自分が勤務する会社組織がそういう根本的な欠陥を抱えていても、会社も大切、しかし一方で、会社が経営する工場の廃液で、病気が発生し、苦しんでいる人たちがいる。逃げたいけど逃げる事が出来ない、関わらざるを得ない人々がそこにいるというような苦悩は深いものがあります。『苦海浄土』（池澤夏樹個人編集、世界文学全集第3集、河出書房新社、2011年）を書いた石牟禮道子さんは、そのような細川一さんのことについて、次のように書いています。「先生ほどのまなこに私は遭ったことがない。細川先生の目は、笑いなどしない。和んで優しいかぎりだが、笑わない。お顔は笑われても、先生の御目の光は青みをおびて深く沈み、不思議な光をはなつて燃えている」「先生の孤独は、患者たちの魂と通じていました。わたくしのようなものの魂にさえも。先生の孤独によって、たぶんわたくしどもは、救われていました」。患者の思いと響き合っていた細川一さんのまなざしも深いですが、それを感じる石牟禮道子さんのまなざしも深いものがあります。

実は、細川一さんは、先ほど紹介したイプセンの『人民の敵』を愛読していたそうです。ところどころに線を引いていたそうです。筋を通そうとするあのトマス・ストックマン医師と自分との間に共通点を感じたのだと思います。また、水俣の人々の動き、その厳しい現実、その複雑な思いと共通するものが、イプセンの『人民の敵』に登場するいろいろな民衆の姿に感じられたのだと想像されます。

私は、水俣を訪れました。博多から新幹線で一時間足らずで熊本に着きます。そこから在来線に乗り換えて、すぐ水俣駅に到着しました。子供の頃、鹿児島本線の起点が門司港駅で、終点が鹿児島駅と習っていたので、もっと遠いかと思っていました。予想以上に早く到着しました。確かに便利な世の中です。けれども、新幹線や高速道路は、大都会にモノや人が流れていく仕組みを支えています。それと同時に各地に過疎化をもたらします。そのことは、誰の目で見ても明らかです。そういう仕方で、基準に達していないとされる人も地域も取り残されているのが、私たちの日本社会の姿です。1990年、水俣湾に堆積していたメチル水銀を含んだヘドロを埋め立て、その埋め立て地は公園として整備されています。完成から25年以上がたった今、この埋立地の安全性を疑問視する声もあります。磯の香りが漂う海岸に降りて行って、海水をなめてみました。もちろん、塩辛いです。目の前には不知火の海です。それだけで一つの雄大な世界が現われていました。水俣病が発生してから60年、今はすっかり変わり果てたその現場に自分が遅ればせながら立ってい

ること、しかし、日本の近代化路線の中で馬鹿にされ、取り残されてきた人々、モノ、地域のことを次の時代に語り継いでいくのが、自分に与えられた役割であると感じました。自分自身もまた、人やモノを取り残していく社会のシステムにぶら下がり、その中に身を置いて守られてきたのだと思います。水俣病資料館の関係者は、私が仙台から来たことを知ると、原発事故後の対応では水俣の教訓が生かされていないと語っていました。

さきほど紹介したイプセンの『人民の敵』という作品には、非常に印象深いセリフがあります。たとえば、「多数派には力があります——不幸にして、しかし、正義は持っていません——少数派が常に正義の味方です」というトマス・ストックマン医師の言葉です。いくら主張が正しくても、少数派に立つ者は思想的な孤独を味わうことを私たちも知っています。不幸にして多数派には力があります。しかし、多数派の掲げる正義にはまやかしさがあります。少数派の主張のほうが正義を言い表していることはよくあります。けれども、少数派は負けます。多くの人々から嫌われ、ののしられることもあります。少数派は、苦痛と恐怖を一人で背負わされます。無慈悲なことです。イプセン自身が、手紙の中で、こう語っています、「われわれはみな、われわれの意見をひろめるようにしなくちゃならんと君が言うのは、もちろん正しい。だが、知性の分野で先に立って闘う者は、自分の周囲に決して多数派を集めることなどできない、と僕は固く信じている」。でも、信念を曲げないそういう少数派の貴重な意見を尊重する者たちの最後尾についていきたいと私自身は願っ

ています。それが一人のキリスト者としての矜持だからです。キリスト教が先頭に立って「世のため人のため」と宣言するのはおこがましいのです。むしろ「ここが最後尾！」という看板を探して、その後に続けばいいのです。ひょっとして「ここは最後尾ではありません」という表示を見て、「まだ最後ではないのか」とがっかりして、さらに後ろに並ぶかもしれない。でも、そういう謙虚さが必要です。

トマス・ストックマン医師や細川一医師は、力ある多数派と対峙し、思想的孤独を味わわされました。そのことを思うと、本日の聖書に記されていた「汝の敵を愛すべし」という戒めは、逆に、自分たちの利益に反する主張を掲げる少数派を退けようとする多数派にも向けられているのではないかと考えることもできます。「汝の敵を愛すべし」という戒めは、「少数派の信念を尊重せよ、多数派の人民の敵を愛すべし」というふうにも私には聞こえます。これは、世の中から消してしまいたい少数派を愛せるかという深い問題です。それでは、人民の敵として扱われる少数派を愛するためには、どうすればいいのでしょうか。そのためには、少数派の主張に熱い思いになるだけではなく、「今日もこんなにのんびりと楽なことをやっけてもいいんだ」というような教会的な息の長さも必要です。つまり、日常生活を送りながらも、待つことに耐えるのです。私たちには私たちの世界があるのです。食べていけるといって、暮らしていけるといって、人と出会い、人と関わることといった、日常生活を送る私たちの今の姿勢が神の働きとなるのです。

こういうエピソードがあります。ロシアの文学者ゴーリキーの短編『どん底』に紹介されています。ゴーリキーは、自分にとって社会や人生が大学であるという趣旨のことを述べた稀有な作家です。『どん底』においては、「真実の国」に行くことを願ったものの、それを見出せず、絶望して自殺した男に関する興味深いエピソードがあります。その男は、

「この世には、真実の国があるはずだ・・・特別な人間が住んでいる・・・立派な人間ばかりで、互いに尊敬し合って、どんなささいなことにも互いに助け合っている・・・そして、その人たちのところでは、何もかもがとてもいい！」

と言っていました。彼のところに学者が流されて来ました。彼に「真実の国」に行く方法を尋ねました。しかし、何でも知っているはずの学者が持っている地図や本には、「真実の国」のことは一切記されていませんでした。男は怒って、学者を殴り殺し、自分は家に帰り、首をくくって死にました。これについて、キング牧師と共に公民権運動で活躍したユダヤ教の指導者ヘシェルは、現代キリスト教が、そのエピソードの男性と同じように、かつての原始教団のような揺るぎないメシア待望信仰——「救い主が来ますように」という粘り強い思い——を持ってなくなっていると言っています。要するに、「真実の国」を求めていた男は、救いを待望することに耐えきれず、これを待ちきれなかったというわけです。非常に深い洞察です。

人を支配し、人を動かし、物事を秩序付ける力が権力です。政治も学問も経済も、権力に支えられて力を発揮します

が、「何もかもがとてもいい」という意味での真実の国を実現するわけではありません。強者が弱者に助けを提供するというような「安心の正義」が実現されているわけではありません。また、互いに利益を共有できるというような配分の正義が簡単に実現できるわけでもありません。権力が安心の正義や配分の正義をもたらしてくれるといいのですが、権力は私たちが望む仕方では機能してくれません。私たちは何らかの仕方で、そういう権力の中で生き、支配され、あるいは守られています。人を支配して苦しめている仕組みなどなくて、「互いに尊敬し合って、どんなささいなことにも互いに助け合っている」というような真実な国があればいいのですが、そういうアナーキーの状態——いっさいの支配がないということ——の真実の国は私たちの手の届かないところにあります。しかし、いつも完全に支配されっぱなしというわけではありません。人を支配する側は、自分が支配している人々の視線や評判を意外と気にします。支配する側でありながら、支配されている人々の視線を意識して、弱みを見せないように動き、逆にあやつり人形のようになることがあります。こういう微妙な絡みが、支配する側と支配される側との間に働きます。そして、支配する側の上にも支配される側の上にも、太陽は上り、雨が降ります。これは事実です。

ここで、沖縄のことが思い浮かんできます。住民主導型の沖縄の平和運動は、日米安全保障とかアメリカの軍事戦略といった巨大な枠組みの中で何度も叩きのめされながらも継続している腰の強さがあります。直接的に物事を変革していく

政治的力はなくても、その地下水脈には大きな見えざる政治的勢力が沖縄には以前から横たわっているからです。それが今表面化しています。理不尽な状況の中で交差してきた互いの思いが、「支配されっぱなしではないのだ」という言葉となっています。沖縄に押し付けられた成り替わることのできない事実は、言葉と行ないを通して、「うちなんちゅ」ではない私たちの突き付けられています。そのことにより、私たちもまた、「できることをさせて下さい」と支援する働きへと招かれています。沖縄の平和運動は、市民主体の抵抗の論理と平和主義を提示し、弱さで輝いています。そういう意味では、「汝の敵を愛すべし」の善き実践例です。

「汝の敵を愛すべし」と教えたイエスが今、このめちゃくちやな世の中のどこにおいても、今すぐにも誕生しようと母親たちの胎内で胎動しています。その子供たちは、「汝の敵を愛すべし」を真剣に考える人になる可能性を持っています。だからこそ、母親の胎内にいる時間(約 300 日間)を含めて、少なくとも最初の 1000 日間は大切に守られてほしいものです。人間の成長にとってきわめて重要な 1000 日間、十分な栄養を与えられていない 5 歳児未満の子供は、世界全体で 1 億 6 千 5 百万人いると言われています。「きよし、このよる」という歌の三番の歌詞を思い起こしてください。「きよし このよる、み子の笑みに めぐみの み代(みよ)の あしたのひかりかがやけり ほがらかに」とあります。そういう大切な 1000 日間を私たちに訴えているように聞こえます。そういう大切な 1000 日間に十分に恵まれず、日本

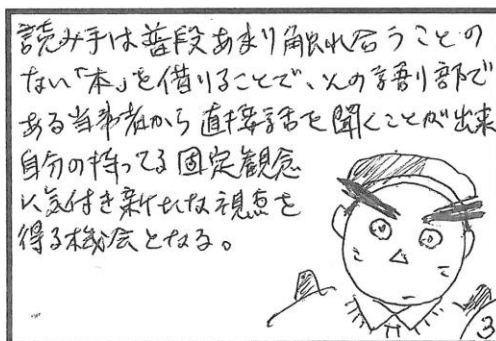
中のイエスたちが待機児童へと横滑りしています。私たちは今、これから生まれる日本中のイエスたちを次の時代の希望として受け入れていきましょう。そして、そのためには、「汝の敵を愛すべし」を実践できるかもしれない子供たちを生み、育てるかもしれない若い人たちを大切にしなければなりません。中年・老年世代は、体力は衰えても、それなりの世間知がありますから、体と心に刻み込まれた世間知を生かした支援を何らかの形で出来そうです。中年・老年世代の顔のしわや表情は、世間知をよく物語っています。このクリスマスの季節は、老いも若きも互いに、いのちの深さ、いのちの重さ、いのちの尊さを共有できる時です。



生きている図書館



生きている図書館(Ⅱの2)



「トリビंगाライブラリー-日本事務局の説明」及び「ビュースンライブラリー 事始め」(人間の科学社)より

あんなこと こんなこと

12月2日(金)

ホーリー・ツリーの実

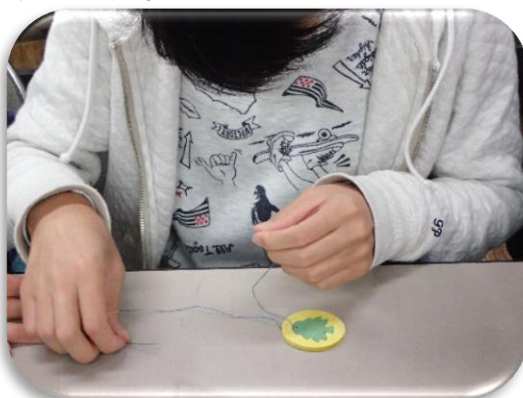
園庭のホーリー・ツリーの実が真っ赤になりました。



12月4日(日) 9時～

教会学校

クリスマスの制作で、リースを作りました。やなぎの枝を9月に採って、丁寧に皮をはぎ、輪にしておいたものを、リースに変身させました。



12月4日(日)12時～

津門川川掃除

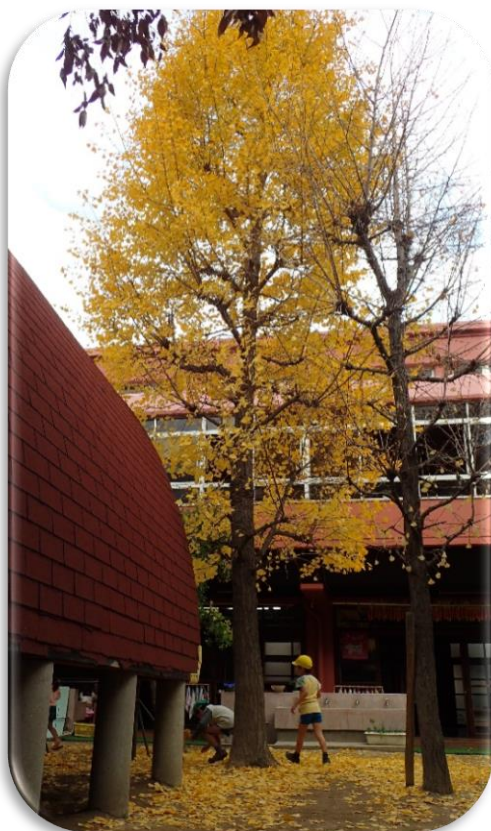
今月の川掃除も、高木北小学校6年生の男の子たちが集まってくれました。園児や、地域のおじいちゃんまで、老若男女で頑張りました！



12月6日(火)

幼稚園庭のいちようの木

秋には、たくさんの収穫があったいちようの木が、すっかり黄金色になって輝いています。



12月9日(金)～11日(日)10時～17時

クリスマス手作りグッズ展

28組もの人たちが出品され、素敵手作り一品ものがたくさん販売されました。



12月14日(水)17時～18時

合同子どもクリスマス会

城村奈都子さん(ピアニスト)をお迎えし、35人の子どもたちが音楽隊として出演！先生たちのパフォーマンスあり、お母さんたちのコーラス隊ありと、音楽にあふれる1時間でした。



12月16日(金)12時～

福 in ランチ

西宮公会堂集会所

NPO 法人 人と人および人と自然をつなぐ企画主催で開催しています、本日は、クリスマスランチにて、特別価格の800円での提供でした。

メニューも、クリスマス気分たっぷり、ミートローフや、カブレード&アボガドとサーモンのピンチョスや、豆乳スープなど、デザートにティラミスまで。とっても豪華でした。



12月17日(土)15時30分～18時30分ごろ

NISHIKITA のクリスマス

高松公園(兵庫県立芸術文化センター前)、芸文センターエントランス 等

2017年の佐渡裕芸術監督プロデュースオペラ「フィガロの結婚」にちなんで、スペイン・セビリア地方の料理が屋台に登場しました。3時30分からは、お餅つき大会が行われ、雑煮として200食、振舞われました。寒い中でしたが、「よいしょ！よいしょ！」の掛け声で、餅がつかれているのを見ると、やっぱりワクワクして、寒さも忘れるほどでした。

17時30分～は、芸文センターエントランスで、ミニコンサートがあり、公同幼稚園コーラス隊36名が、大勢のお客さんの前で、美しい声を6曲披露しました。最後の2曲は、子どもたちも参加し、とても盛り上がりしました。



～あるがままに～

「順子先生の出会い日記」

まだ 30 年にはならないですが、まもなくそれくらいという年数になる講義とかの仕事。思い出してみれば、まあ力もないのによくめげずにやってきたなのその仕事です。なんといってもその世界が広がっていくのを助けてくれたというか大きな力になったのは、子どもたちとの時間です。具体的な子どもの描写が面白いと言っていただき、おじいさんやおばあさんたちにも好評！、しかしだんだん気をよくしていったら、数年しての保育士の受験講座で「子どもの話はいいから試験対策をして」「もっとわかりやすく」などと講義後に突っ込まれ、落ち込みました。でも「楽しそうな話を聞いていて、絶対試験に通って保育士になろうと思った」との感想にまた立ち上がったりもしながら、よくぞあちこちでやってきたものだと思えます。開拓はしない、もちろん売り込みも不向きなわりには、何と近畿 7 府県を制覇（1 月になぜか残っていた三重に行くことになり）、滋賀も奈良もよく出かけました。和歌山も入り口くらいの海南市とはいえ、足を踏み込みと一応記録に加わり。九州も半分は、四国は徳島を残し、中国は日本海側は残念ながらですが、こうやってみると荷物を背たろうての旅姿、それがまもなく 30 年ほどになのです。最初のころはほんとに「背たろうて」、でとにかく大荷

物でした。絵本に人形たちにと助手がいっぱい。最近は何もなくても大丈夫くらいの度胸が、これ体験のおかげですね。またその場その場に助けられました。11 月の講演会では最後にいろいろ考えようと思っていたら、呼んでくださった先輩が「どうこう言ったって、何かいっぱいあって苦労したって、子どもはちゃんとおとなになるのよね」と口にされ、ほんとだほんとだわと急に力をもらい、前夜はレジュメとの睨めっこの予定が、恩田陸の「蜜蜂と遠雷」の大作に手をつけてしまうという時間に。ヤバイヤバイと思いつつも 1 ページもう 1 ページなんてことを。いやあ余談ですが、図書館で 100 人以上の待ちらしいですよこの本。希望の方は当図書館に予約をしてください。

2010 年から縁あって大学の非常勤講師の仕事をしていただくことになりました。講座で自費捻出で、あるいは子育てに今悩んでいてなどの学びに必然性のある面々とは違っての「根拠のない自信」「恥を知らない若さ」との闘いがここにはあります。専門学校での体験もそれなりにあるものの、この 10 代から 20 代へと移行していく方々のこと、その裏か表の事情ってご存知ですか？いやあまあすごい、しかし宇宙人てことはなく、心の通じる地球人、ましてや日本語の通じる方々ではあります。

話が長くなりましたがその面々とのお付き合いの日々を今もです。

「やっとそれらしい話が聞けるのだとうれしくなりました」「いよいよ“保育”の学びかな」など講義一日目の感想。他では何の授業聞いている日々かなと思ったりもするけれど、子どもの話は万国共通、子どもが出る映画はヒットするみたいなもので、黄門様の印籠です。しかしここで気をよくして気を抜くと再びの間違いを起こすことになりますから。そこはそこなりの努力たるやです。

いろいろな科目をですが、この秋から「保育者論」を2コマ。ここで何が起こったか、その「テキスト」なるものが先輩方から集結してきたのです。いや、わたしは既存のテキストはいらん！というのには簡単には通用せずに、まあ並んでしまいました。しかし怖れを知らずのわたし、自信の根拠は、たとえば、甲斐信枝さんの絵本の1冊1冊です。子どもたちの時間を考える時に欠かせない1年が四季がそこにはある。保育者にとっての「眼」や「気づき」「息遣い」など、いわゆるテキストではなく「いのち」のこもった絵本などが残されていていっているのです。そして最近NHKのテレビに出演、そのスケッチなどをはじめ画業の姿勢はそれこそ「保育者論」そのものです。

また毎日の先生たちの記録の中の一コマから考えることもできる、保育者の位置。一つのエピソードも「表現」の技術としてとらえるか、姿勢としてとらえていくかで、講義の題目は違っていても、見方迫り方で進めていくことができる。そういうわけでテキストの贈呈すみません

でした。そしてそういうことで立派なテキストは隅っこに。その結果の一つとして、こんなことがありました。文句言いでは有名な一人の学生、講師室の話題になっていましたが、何と「抑え込み」成功。一番前で聴いています。努力は必ず報われる。でも贈呈の中のお一人の先生いわく、「我々は実践がないから最後にはそんなテキストが必要になるのよね」。あなたも、最後にはという雰囲気でしたが、いやいやもう終着駅が見えても来たし、大丈夫。やはりどんなコミュニケーションも誰とのコミュニケーションも、日々の生きる体験からです。

それにしても毎日豊かな話が溢れているのが子どもたちとの時間。これなくして学びの途上の若い方々への伝承はありえない。しかしそれ以上に毎日子どもたちと一緒にいること、その息遣いを感じること、これは一番の学びですね。

しばらく休んでいたDくんが朝にも会ったのに、事務所にも顔を出しに来てくれました。登園できたうれしさの表現、可愛いですね。そんな子どもたちと一緒にいる、その時間は至福そのものです。



「こうぞう版行動報告書」

出かけたいところがあれば、前月末の火曜日までに直接介護事業所にメールで知らせておきます。そうすると入浴といっしょに外出予定も決まります。たいがいは日程をこっちで決めず、空いているところに入れてもらうことにしています。11月に入ってすぐに1通の手紙が届き、桂雀三郎さんからの独演会の案内でした。無理を承知で言ってみたところOKとのことでした。

雀三郎さんとは25年ぐらい前、教会主催の落語会がありその打ち上げでしゃべったのがきっかけで年賀状、暑中見舞いを交わし現在に至っています。

当日は、美容院でカットしてもらったあと梅田に向かいました。サンケイホールブリーゼの下で昼を済ませ、会場へ。久しぶりに生の落語を聞くことができました。

(下平 浩三)



日本基督教団西宮公同教会集会案内

早天祈祷会	毎月1日午前6時30分から	於：西宮公同教会集会室
教会学校	毎週日曜日午前9時から	於：西宮公同教会礼拝堂
聖日礼拝	毎週日曜日午前10時45分から	於：西宮公同教会集会室
聖書研究祈祷会	毎週第1・3水曜日午後7時から	於：西宮公同教会集会室
読書会	毎週第2・4水曜日午後7時から	於：西宮公同教会集会室

(早天祈祷会、聖書研究祈祷会、読書会は、2016年4月よりしばらくお休みしています。)

～♪ぼくのみる空ときみのみる空はつながっているから～

「アメリカでも奮闘しています」

アメリカの生活の中で、やはり日本と大きく違いを感じるのはセキュリティーに関する事柄です。小学校から高校、また幼稚園での避難訓練は、火事や地震が想定されるのではなく、「テロリストが学校を襲った場合」ということが想定されます。「ロックダウン」と言って、すべての教室の出入りが禁止され、カギをかけて教室内に子どもたちが閉じこもり、銃撃が収まるのを待つという避難訓練です。

また、学校への送り迎えは子どもが中学生であろうと高校生であろうと、親が車で送迎をするのが当たり前になっています。それはやはり子どもへの犯罪、誘拐事件が後を絶たないからです。

銃社会であり、またありとあらゆる民族が一緒に暮らすアメリカという大きな国で、犯罪のレベルが上がることで、また日常的に銃が使用されることで小さな事件でも致死率が上がることは免れられません。警察の仕事も、日本よりもずっと死と隣り合わせであることを感じます。犯罪が起これ、そこに駆けつけた警官が打たれて死ぬことも多々ありますし、また警官に打たれて犯人が現場で射殺されることも多々あります。様々な理由から、個々人の防犯への意識も高く、各々が身を守ることに責任を持たされています。

先日わたしたちの教会にボーイスカウ

トのメンバーたちがセキュリティーシステムを取り付けたと話がありました。わたしたちの教会には4人牧師がいますが、一番責任のある位置にいるトップの牧師がそれらすべてのセキュリティーシステムを携帯で管理できるとのことでした。携帯電話を見せていただくと、教会のありとあらゆる入り口に赤外線カメラが取り付けられていて、夜真っ暗闇の中でもすべてのドア付近の風景を監視カメラがキャッチし、赤外線にて真夜中でもぼつちりとすべての風景が録画され、携帯電話にそのビデオが配信されてくるというものでした。

その携帯電話を見せられてわたしは驚くとともに一つの出来事を思い出していました。それは、わたしが西宮公同教会で働いていたときに、朝出勤すると事務所のドアのガラスが割られていて、中が荒らされていて誰かが侵入した形跡があった出来事でした。朝からとてもショックで気持ちが悪かったのですが、その時の菅澤牧師の対応は、警察に知らせることではなく、「以前にも同じようなことが一度あり、その時に事件を起こした人がもしかしたら今回の事件に関係しているかもしれないから、彼を探して話を聞こう」という、教会自ら人探しをするという行為でした。もし見つかって、彼が事件に関係していたら、教会でしばらくボランティアをしてもらって更生してもらいたいということも話しておられました。

わたしは今でもその時の先生方の対応と教会や幼稚園の判断が忘れられません。これこそ教会の対応だと今でも信じています。

今、わたしたちの住んでいる国、また教会が向かっている方向はどこなのか、わたしにはまだ理解できていません。様々な人種が住み、治安も悪化し、また銃社会で、マリファナも合法化されていくこの社会で、確かに国民の不安が広がっています。ですが、一番必要なことが防犯対策を完全にすることなのか、それらがこの社会から身を守ることにつながっているのか考えれば考えるほど、わたしにはそうは思えないからです。

イエスキリストが馬小屋で、宿屋を締め出された状態でお生まれになったその日を覚えてお祝いするクリスマスの季節に、教会のすべてのドアに鍵がかかり、誰一人不審者が入って来られない万全なセキュリティシステムを整えた教会のこれからについて、また同時に社会がどんどん住みにくく、治安を悪化させているこの現状について、様々考えさせられている今日この頃です。

(山本 知恵)



名護ぬ七曲 (51)

「復帰」後の沖縄県政 4

生協で戸村のドレッシングが安かったので張り切って2本注文したんだけど、良く考えたら野菜が高くて買えない。(泣)▼さて今回は大田昌秀知事時代の所謂「代理署名拒否」について、『ジュニア 版琉球・沖縄史』P.318～P.321 の「歴史を探究する」コーナーから学んでまいりたいと思います。

【反戦地主】 沖縄の米軍基地が占領のどさくさに紛れて強制的且つ暴力的に建設されたことは皆さまもよくご存知であるかと思います。前にも書きましたが、占領地であれ他人の土地や財産を横取りするのはダメです▼米軍に土地を奪われた地主さんは沖縄返還当時 27,000 名ほど居られたそうです。日本政府はそうした地主さんたちと賃貸借契約を取り付けて、“合法的に”米軍に土地を提供しようとしたのですが、その内の約 3,000 名もの地主さんが、戦争目的のために土地を貸すことに反対し契約を拒否しました。通常の 6 倍の借料という好条件ながら、やはり戦争や戦争に協力させられることについては、どうしても許せない気持ちがあったのです。

【公用地暫定使用法】 それで日本政府はどうしたかと言うと、「公用地暫定使用法」(1971 年)なる法律を作って、契約していない土地でも向こう 5 年間、強制的に使える(米軍に提供できる)ようにしたのです。「なんじゃそりゃ、もう何でもありですか？」って思った人は少なくなかったことでしょう▼5 年の猶予を得た政府は、この間に契約をガンガン進めます。札束の威力を借りた従来の説得方法により、期限を迎える 1977 年にはついに残り 500 名となりました。500 名と言っても大半は地籍不明状態が続いていた土地だったので、契約を交わそ

うにも相手が分からないものですから、日本政府としてもどうしようもありません。

【地籍確定法】そこでまたしても新法制定です。困ったことがあったら何でも都合勝手な法律を作って突破することを覚えた権力は、国会に「地籍確定法案」を提案します。地籍確定と更に5年の延長がセットになった法案です。が、「いくらなんでもそりゃ強引過ぎるじゃろう」ということで国会でもかなりモメます▼結局「地籍確定法」は「公用地暫定使用法」の期限である5月15日に間に合わず、それを3日過ぎた18日に成立することになります。で、この4日間が国による土地の不法占拠状態となってしまうしました。4日間とはいえ国が法律を守らないのは良くありませんね▼これが1977年の5月で、同法によりあと5年延長されましたから次の使用期限は1982年ということになります。

【一坪反戦地主】勿論、未確定の土地ばかりでなく、はっきりと「私は戦争に反対です」という意思を以って契約を拒否する地主さんも居たことを忘れてはなりません。

この反戦・反基地の草の根運動は次第に拡大し、「一坪反戦地主」は一時2,000名にも達したそうです。

【米軍用地特措法】いずれにしても法的使用期限は1982年5月までです。次に政府が持ち出してきたのが「米軍用地特措法」。正式名は「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約第六条に基づく施設及び区域並びに日本国における合衆国軍隊の地位に関する協定の実施に伴う土地等の使用等に関する特別措置法」。(長えし)▼1961年以降適用例の無かった埃まみれの法律ですが、どこから探し出してきたのか、政府はこれにより更に5年の強制使用を主張。使用期限がまたまた延びて1987年5月までとなります。政府はいつまでこんなことを繰り返すつもりなのでしょう。

ちょうど時間となりました。まだ「代理署名拒否」の前の、そのまた途中ではありませんけれども、今回はとりあえずここまでといたしましょう。では又次回！

(羽柴 禎)

～ つとがわ・あれこれ ～

1996年に、中島みゆきのアルバム「パラダイス・カフェ」が出た時、新聞のインタビュー記事で、その中に入っている「阿檀の木の下で」のことで、「歌が出来上がるのに、15年かかった」「そこに身を置くのは難しかったから」と答えていました。“そこ”は沖縄で、沖縄を歌った中島みゆきの歌が「阿檀の木の下で」です。沖縄とは歌われていませんが、「戦争に負けて」「貢がれた」沖縄のその時と、その後が確かな言葉で歌われています。

決してコンサートなどでは歌わなかった「阿檀の木の下で」を、前回のコンサートツアーで「南の島で戦っている人たちに思いを寄せて！」と短い言葉を添えて、たぶん初めて歌いました。

波のかなたから流れて来るのは
私の知らない貝殻ばかり
波のかなたから流れて来るのは
私の知らない寿歌(ほぎうた)ばかり
遠い昔のあの日から この島に人はいない
みんなみんな阿檀(あだん)の木になった
波のかなたから流れて来るのは
私の知らない国歌(くにうた)ばかり

遠い昔にこの島は戦軍(いくさ)に負けて貢がれた
だれもだれも知らない日に決まった
波のかなたから流れてくるのは
私の知らない決めごとばかり

陽は焼きつける 阿檀は生きる
大地を抱いて阿檀は生きる
山の形は雨風まかせ
島の行方は波風まかせ
遠い昔にこの島は戦軍(いくさ)に負けて貢がれた
だれもだれも知らない日に決まった
誰も知らない木の根の下は
主(ぬし)の見捨てた貝殻ばかり

オスプレイの離着陸する危険が懸念され基地建設反対の厳しい座り込みが続いている時の沖縄県北部、名護市で墜落してしまいました。その原因等が明らかにならないまま、数日休んでいたオスプレイの飛行訓練が再開されました。一連の米軍・米国と日本政府の見解・行動に対し、沖縄の人たちが述べる時の言葉が、「植民地」です。例えば、墜落したオスプレイの配備ということでは、沖縄の人たちは、政治における意志表示では認めてきませんでした。その意志に、一切耳を貸さず、米軍・米国と日本政府はオスプレイの配備を決めてしまいました。そして、事故は起こってしまいました。なのに、米軍・米国と日本政府は、沖縄の人たちの強い反対にもかかわらず、有無を言わず訓練を再開し、オスプレイは名護市上空などを飛び回っています。「…住民を政治的・軍事的に抑圧・支配」する「植民地」が沖縄です。

戦争に勝ち貢がれた米国と、戦争に負け貢いだ日本が翻弄する植民地沖縄です。

(S)

12月12日まだ暗い早朝、武庫川沿いを車で走っていると南西の空に黄緑がかった大きな火の玉のようなものが、一瞬沈黙のあと隣の人に目撃確認。帰宅後ネット検索してみたら岡山や大阪でも見たという投稿があった隕石落下(たぶん)、その後それ以上の情報は見つけれなかったが、どこに落ちたか。太平洋？オーストラリア？空中霧散？かも、と隣の人。あとで思い返してみればこの出来事があったのは、米軍機オスプレイが名護市沿岸に落ちる前の日のこと。天災と人災。

(Y)

「装飾ダーニング」って、ご存知ですか？私も最近まで知りませんでした。虫食い！？のセーターなどをおしゃれに可愛くお直しをする方法です。つま先やかかとに穴が開いた靴下や、引っ掛け・虫食いの被害にあったニットなど、衣類のお直しで最近注目されているそうです。「ダーニング」とは英語で“かがる・縫う”の意味があり、穴を針と糸を使って補修するイギリスの伝統的な補修技術の一つだそうです。カラフルな糸でおしゃれな模様のように仕上げるのが大人気で、日本の“かけはぎ”みたいなもので、経糸に緯糸を通してながら機織りのように修繕する技法です。あえて目立つ色の糸を使い、刺繍に組み合わせたりして、逆に可愛いアクセントにできるのが魅力です。好きな色の糸で自由な形でお直しできるので、とても楽しいです。ちょっと“ヘタウマ”なくらいが味が出て、良い感じに仕上がるらしいですよ。一度、お試しください。

(K)

“全国都道府県別魅力度ランキング”4年連続最下位の茨城県。46位は栃木県、45位は群馬県。ここ数年はずつとこの3県で最下位争いをしているらしいです。確かに、小学生の時に習った日本地図、この3県 の場所がなかなか覚えられなかったなあ・・・。

も！！茨城県は実は魅力いっぱい の所です。北に上 がれば袋田の滝。ここはまだ行ったことがありませんが、近々、迫力満点の冬の滝を見に行く予定です。近くには本州一の長さの歩行者専用の橋から跳ぶバンジー ジャンプがあります。これは恐ろしくて挑戦はしませんが・・・。つくばには宇宙センターがあるし、世界最大120mの牛久大仏も見ごたえがありました。クラブ W 杯でレアル・マドリードと決勝を戦った鹿島アントラーズも茨城県！いろんな魅力をまだまだ見つけていきたいです。

次こそは最下位を脱出してほしいな～と思いつつ、でもここまでできたら連続記録を伸ばしてほしい氣もします。

(C)

事のの流れの都合でおおなわを跳ぶことに。これはちょっとあとに響いた。次にずっと咳が止まらない。薬飲みすぎに少し心配になり、しかも薬局で買い続けていた薬、ある時にこの薬が効かないなら、医者に行ってくださいと薬剤師に厳しく言われ、ほんとにこれじゃないといけないと全面信頼だったこともあり、何とこの医者嫌いの腰が上がった。次は年に2度は歯科。夏が過ぎた、次は夏にねと言われてたのに冬がもうここに来ている。で、せめて1年間にはと歯科に。このわたし実は毎日ある薬が必要という人で、これも数か月に一度病院に検査と投薬に行かなくては いけない。さぼっていてこれは相当に絞られた。というわけで何と4種類の医院に。ここで言いたいことはまあ病院代が！咳は慢性気管支炎、その医師が言うには相当のストレスが原因と。ストレスはいいとしてその薬、特別の調剤がされるのだけれど、薬代に目を剥いた。無事に1年を終えられそうであれしいけれどまあこの出費よの11月から12月でした。

しかし、どんな出来事があってもどんな局面を迎えても淡々と毎日に向き合う、そのことを子どもたちに助けられる日々からしつかり教えられました。わたしにとつての妙薬は「子ども」、しかしこれは時として劇薬にもなりかねない。彼らの安全が完全に保証されている今の時代ではないからです。妙薬であり続けてほしい、そうも願っている12月。師走の日々を走っています。

別件！公同は口語訳だけれど新共同訳しか持っていないし、少し大きめの口語訳の聖書がほしいな、最近目が見えにくくなったから讃美歌も礼拝堂にあるのではなくて、との相談に「あります、あります」。で、あちこちから出てくる、出してくる。教会では受洗記念に結婚記念に転会記念にと折々に聖書や讃美歌が贈られる。それらをごっそり一堂に、気に入ってもらえて使ってくださいことに。しかし裏表紙に書かれている記念の文言に歴史を感じました。1970年の結婚の折には教会から聖書、婦人会から讃美歌といただいていた。受洗記念は当時の教会からですが、すごいのはどれも見事な達筆の墨字、先輩たちは実に侮れません。

(J)

カット (A・T)

政治・宗教思想研究会／関西神学塾

《今後の講義予定》

1月13日(金)、20日(金)、27日(金) 予定調整中